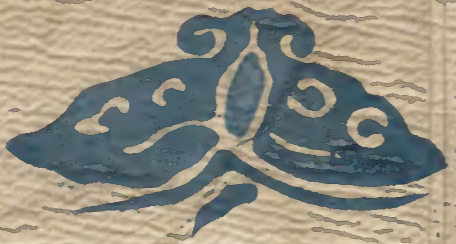




高麗書



内閣文庫			
二二函	二八四冊	和書	類
二架	〇〇冊	〇〇號	類

(九三和)

三十九

内閣文庫	
番號	和 28420
冊數	100 (39)
函號	211 300





明治十二年
癸未

汝志里卷之三十九 宝永



圓光大師五箇加謚勅書

圓光東漸大師証事略

太神宮公乃御記

市人之辱

弘才方角を了る事

寂舟院乃少初

西山三鉢寺

鞍國山光院寺

大奔山名比禰寺

傍去翁



同御忌法事次第記

知恩院追崇略記

藤九各番

東大寺西建禰役

本因坊信末のこゝ

西山善峯寺歴代

東大寺山禰寺

大奔山抄巻形寺

龍藏寺家代

志徳丸梅英丸法りのみ



妙公手書在周在の唐
播州免在郡魚海
海遊乃誤

野州足利學校創建
江城乃中門廊

○宝永八年卯正月圓光大師半千忌洛東知恩院
法會 十八日勅使平松中納言時方卿
勅書

勅圓光大師勢至権跡慧日照之高耀台嶽之
上宗夙穆之始開淨土之源念仏三昧深示群
聖之蘊誓書一紙固結四家之心非師之從慈
航誰離苦海每人能乘宝筏自濟迷川遺教總
示既歷五百星霜功德浩然爰偏六十州郡仍
重電章加謚東漸号

宝永八年正月十八日

○知恩院 勅會圓光東漸大師五百年御忌法事

次第

前日檢校堂內莊嚴眾僧座席先樂器等

當日寅刻於樂屋發乱声三節奏神分

刻限先鳴鐘集僧

一番作相外座僧眾集會堂內左右席差坐

二番作相公卿殿上人并地下官人參堂

職眾集會三門內之幄屋前

導師乘輿供奉行列

次眾僧前治郡省着出居坐奉行頭并着出居坐

次公卿着坐玄蕃寮次導師入於次於樂屋發乱声

次眾僧前左省左右相分率於眾僧進步行列

眾僧前左右各引頭一人讚眾左右各梵音眾左右各散華

眾左右各洒水一人唄師左右各長老眾左右各

次眾僧前到階下左右止立眾僧入堂各守標住立而後着坐

次迎導師舞人樂人出樂屋外左右列立鳥蝶同列凡五十八人

次吹調子平調次樂行事左右率舞人樂人恭向幄之前行列

左樂行事 舞人美婁迦陵頻樂人

右樂行事 舞人一鼓胡蝶樂人

次作樂鳥向樂 一曲奏畢賭祿左右

次導師出幄 執細二人執蓋二人持幡童左右從僧左右

各三人行列 十弟子從後上堂美坊官御後官人檢非供

奉眾僧前向在階下左右止立

次導師上堂執香炉着礼席樂止衆僧前退出

執細執蓋退入樂行事率舞人樂人於樂屋從

僧先進并備道具礼席展坐具高坐敷革坐前

机安居管机安香炉管共如意設畢着外坐

次摠礼伽陀發声吹音取 作樂 廻盃樂

導師三礼登高坐圈昏寮先

次圖書官人鳴金鼓 二下 作樂 十天樂

傳供正面階級左右列童子八人階上左右列

弟子左右童子各執供具授十弟子 次房傳授備

次殿上人二人 布施取 捧仙布施備高座之股机

之上

次振持 三節 次供舞 左迦陵頻 舞畢入於樂屋

次鳴金鼓 一下 作樂 胡飲酒

唄師 左右二人座起着左右之座 坐畢發声

賦華管堂童子 四人 左右 相分 圖書寮為先就華

管机下圈昏執華管授堂童子 二人 授殿上人

二人 次第賦導師 并 僧 正 西人前次圖書亦

執華管授堂童分賦左右 四人 衆僧 但除 賦復坐

次衆僧 内外座 起立 作樂 賀殿急

散華師 二人 發声衆僧同唱 散華畢樂止

衆僧着坐 唄師復坐 次鳴金鼓 一下

作樂 拔頭

讚衆起立唱讚 讚頭二人執鉦 餘者執筆管 職衆起立助音讚畢

鳴鉦 樂止 着座

次鳴金鼓 一下 作樂 梵音衆起立作梵

音頭二人執香 爐余者執華管 職衆起立唱和 梵畢着座 樂止

次鳴金鼓 供舞 左右萬歲樂 右延喜樂 撤華管

導師并僧正兩人之華管極薦撤之

樂僧之華管堂童撤之

圖書寮就華管机下各授圖各收之

次導師唱導

神分表白 訖誦發願 四弘咒願

仙名讚嘆隨意回向

次後伽陀發聲 鳴金鼓 二下 作樂 長慶子

導師下高座執香爐着礼席礼拜而退着 樂止

次被物

導師 唐織 一重 大納言 厚板 一重

中納言 縫薄 一重 宰相

大僧正 白綾 一重 大納言 同 一重 中納言 僧正

白綾 一重 中納言 同 一重 宰相

長老 左十三人 各平絹 一重 殿上人 五人

次導師 英僧 正兩人之被物 御藏 出納 極薦

公卿 長老十三人被物 御藏 出納

殿上人

次第傳執 次鳴金鼓 下 入調舞左右奏舞

左甘州 太平樂 陵王

右登天樂 古島蘇 納蘇利

撤被物導師之被物坊官 二人撤之僧正二人之被

物侍者二人撤之長老十三人各自掛之

次衆僧退出 先下臈 次上臈 左右二行次第退去

次徒僧十弟子降階下執蓋進未執細如入堂之

儀衆僧先行

次導師退出如入儀還列 還城樂 到幄前乘輿

室永八年正月廿二日辰半刻一番作相已上

刻二番作相未下刻法事畢以不日暮注殿寮

無立庭幃之儀

地下役人衆僧前 小林主稅頭 藤木下野守

堂童子 津幡刑部權少輔 高橋大隅守

難波左京亮 藤木右近衛將監

出納 右近衛將監

御藏 真繼刑部少輔

圖卷寮 小佐治隱岐守

主殿寮 小野治部丞 小野兵部丞

樂人五十八人

衆僧

大僧正 應譽 院寮 覺了院 僧正 空譽 會奉行一人

長老十三人 唄師共 散華衆十人 伽陀一人

讚衆十人 十弟子十人 梵音衆十三人

徒僧四人 坊官 園宮内卿法印 岩波刑部卿 角田大藏卿

一院衆十人

聚會州衣上人六百八十口 出世僧侶凡二千餘人 自廿二日至廿四日 初夜礼讚說法

右行列

一番 自御本坊至三门内 幄屋行列

一心院

門中四五寺

先松

門中四五寺

先拂

長老

侍者

白張

白張

白張

侍者

白張數輩二行

青侍十人

同

小結三人

同

大童子

同

中童子

同

同

同

持幡童

同

小童

坐具

草坐

香筥

同

十弟子五人

同

侍法師

同

法親王御輿

抄掛教輩

布衣三人

同

御傘

草鞋

鼻高

青侍

同

同

上童

童

童

布衣

同

傘持

沓持

青侍

同

同

坊官

青侍

青侍

坊官

青侍

同

傘持

沓持

青侍

同

白張十人

同

御後官人

青侍

同

衆僧入堂幄前行列

二番

玄蕃寮

治部省

讚衆五人

同

梵音衆五人

同

散華衆五人

同

洒水

上人五人

同

唄師

同

三番御導師 樂人參向行列

樂行事

同

舞人

同

鳥二人

蝶二人

伶人

同

御導師入堂幄前行列

持幡童

同

坐具

草坐

從僧

同

香炉管

居宮

從僧

同

御導師尊統法親王

執細 同

布衣文 同

執蓋

布衣 同 同

官僧五人 同

上童

童子 同

中童子

大童子

坊官

右者以梁道大僧都之本寫之畢

同

御後官人

檢非違使

○勅謚圓光東漸大師詔事略

大師本姓源氏仁明天皇三子正二位右大臣源光公之後

其先冒母氏於漆年之男繼漆元國之家作州稻岡人

也父時國盛行之母盛行也泰氏長承二年癸丑四月七

日降誕今誕生寺之地也見字於勢至九歲喪其父入郡善

提寺師觀覺於智鏡房性善習學賞歎其畧送年延曆

寺源光亦見其俊爽附切德院皇園於此剃髮
受戒年十五三暮之間通受台教久安六年九月
入黑谷散空上人之室稟密藏及大乘律四戒一流
祖良忍相
也凡三藏並諸宗章疏靡不檢閱南都藏俊贈僧
醍醐慶雅等嘆稱之亦八宗外涉弘心宗得幽致
承安五年依注生要集歸善導大師之号乃倡淨
土專修之宗遂出黑谷居洛東吉水盛說專修及
圓頓菩薩大戒緇白靡然向風嘉祿帝召入宮受
戒藤相國兼矣延悃淨土宗義大師述撰擇本願
念仏集呈之實蓮社秘要也天台座主顯真僧正
止觀院證真東塔靜嚴寺長吏公胤僧正高野山

明遍等皆緇林之翹楚也共從大師修專念之行
大師念修久勤三昧矣得屢感勝相建永二年三
月往讚岐弘專修之宗於海裳建曆元年奉詔再
皈都城居洛東大谷今知恩院
是也二年壬申正月廿五
日入滅春秋八十僧臘六十年也葬大谷然後遺
第各弘通淨土宗風就中鎮西善導寺弁阿兩山
善峯寺證空得其宗而西義普布四海此兩師實
大師嗣法正流也安貞二年改葬粟生今光明寺
念仏三昧院是也

○ 知恩院追崇畧記

知恩院慈惠大師所創始号南禪院後
改号妙香院前大僧正慈因改額知恩院
号大谷寺亦謂吉水院

後白川院勅号惠光菩薩 上人号香衣勅アリ

見勅謚大乗菩薩澄円和尚獅子伏象論下同

後嵯峨院重謚普通菩薩亦勅号通明國師寛元二年

甲辰正月十日行幸
知恩院賜謚号

後柏原院勅以知恩院為淨土宗惣本寺重謚号

光熙大士賜震翰知恩院勅願

後奈良院重賜惣本寺綸旨

後陽成院勅以皇子良純法親王為知恩院貫首

是御門跡之
始也

太上皇元祿九年丙子十月大樹執奏請徽号十

年丁丑正月二日勅許大師号十八日勅使左正門
佐清原

宣通登知恩院納勅書号圓光大師

室永七年庚寅九月四日新上西門院以袈衣及

錦袈裟授粟生光明寺真影

今上醍皇帝重冠章室永八年辛卯正月十七日

賜仙洞宸筆花頂山勅額十八日差

勅使前権中納言時方卿捧勅書加謚東漸大師

廿二日勅會除陸
藏法修大師五百年御忌御忌稱呼後柏
原院勅許也

大樹殿下使侍從並紀伊守源信慈朝臣獻香儀

白銀一千枚供米三百石賜下兼碑
凡法會中下行皆関東之命也

○洛東勅願定額花頂山知恩院大谷寺

圓山第一祖圓光東漸大師

名をひく各番を展劣すりしを〜して〜して
貨延は高買の業〜して士君子のしるべきありん

○ 稷下子曰市人之辱越以可忘其辱

嗚呼辱の甚る大緊我より招之恥を知るは豈是
かやぬらんや夫小兒人前〜してまふ〜恥の良
知のむ〜しり初め〜を父兄をい〜しり小兒
り〜して大人のめ〜を〜しり恥恥
乃心を〜し〜驕尤と〜し〜か〜の義を忘
尚た〜和兵軍の陣を逃去〜し〜恥を〜し
あ〜を〜し〜殺奪の悪逆を〜し〜慚愧を〜し
ち〜し〜小兒の〜し〜父兄の〜し〜

か〜し〜や鳴呼又孝の〜し〜恥を〜し〜

○ 南都東大寺再建の事始〜して〜して一百石の
地〜し〜根十五畝目を〜し〜あ〜の〜し〜新嘉好高木
棟本を〜し〜甲申の〜し〜小田の浮山〜し
敷十丈の松〜し〜利を〜し〜
我府下の橋高木〜し〜神人〜し〜
ち〜し〜本を〜し〜許容〜し〜夫神本を〜し〜
仙芽を〜し〜推古の法時何もの〜し
霹靂樹を伐て忠を信〜し〜孝徳帝生國魂の社の
本を伐〜し〜齊明帝於念の社乃本を伐を
〜し〜光仁帝西大寺の西塔乃造料〜し〜

学い教くに納り戸に譲りて中より入て先君の法
志利を承りしりてその事也

教云史臣之命して法撰述有り新羅日本紀神
祇宝典未終詔あまの法府の事あり人あま
初をををいしる事幸に故君誠公の法ゆきを
得て得見し事ありてその方の思ふ出ても君思は
りて

○西山善峯寺 後一条院長元年中源等上人開基以安
居院仁弘所作八尺千手観音為本尊

源等上人 同祖 慈圓大僧正 中興

證空善惠國師 二世 蓮生法師 宇津宮

道覚法親王 慈道法親王

尊圓法親王 道玄大僧正 以下畧之

西山三結寺 源等退隱之地始号往生院本尊仏眼
北画像亦安源等所刻弥陀像

源等 観性 法橋上人 慈鎮 證空 静證

立信 遊観 玄観 示導 示淨 実導

仲空 示鏡 中統 圓慈 実空 明岳

心地 宗雲 廣明 行照 華源 照吟

高空 弘空 惠空

聚衆来迎山禅林寺 洛東永観堂本尊
見返弥陀

真迢大僧正 同祖 宗叡大僧正 深観僧都

永観律師 中興 珍海已講 圓光大師

善惠國師 淨音 観智 智圓 真正菩薩 智通

くしお侍の義太を始てし聖光の教示も
いふ果大の事なりと受侍の今の浄土宗の備を
いふ四宗兼宗なりとも法名をも必読の表市原
をも習ひてすて戒法もく創教通の御名を
おちやうと唱はるる事こそ亦福澤の事なりと
学解もくく修りし事具上人をもたてよき
寺の伊持さしんを新しむる物も世の
宗風を念もよひ友徳の姿も水も是を祀りて
龍藏寺家代

○龍藏寺家代

藤原季清 相模守龍藏寺家祖 秀郷九代始
下向肥前國龍藏寺八幡宮本願

季善 太郎 屬源為朝
領肥前小津東郷

季家 稱龍造寺代に到政家
屬源範頼有武功

自此代に相統其十一世康家也

宗家 高木祖 永平 草野祖

十一代 龍造寺隱岐守康家 水ヶ江村中西中興
永正七年三月卒定翁浄正

十一代 隱岐守家貞 法名貞譽

十一代 大和守胤久 法名長雲久公

十一代 豊前守胤栄 法名賢譽道德

十一代 山城守隆信 康家之男山城守家兼曾孫也依胤栄
早世継家法名金剛院春岩宗竜

隆信ハ新莊寺家中具して武威盛少振公

肥前肥後筑前筑後豊前豊後小の國主也

侍従四位下民部太輔兼肥前守政家

政家居秀吉公唱羽柴氏用菊桐紋慶長十

二年十月二日卒

童藏寺氏
至此断絶

從五位下加賀守藤原直茂

鎌足三十一代少貳十五代
鍋島直壽玄孫也

隆信戰死乃存祖母慶園尼公の命を以て終

造寺の教を治む其子從四位下於前も勝茂

其子從五位下於前も忠直と松平の祐を編み

自此より松平と祐と

○玄翁を五山派南禪寺の僧たり賓出の僧たり

中野國那須野の教生を乞ひて其を徳を以て感

ありて大徳禪師と謚を以て稱する後醍醐帝の

時の人也先帝法皇康永十二年正月十五日卒

○或問世俗蒙昧の女童あり其の真徳丸梅と名を呼ぶ

きそとてふ童子あり是亦も出所ありやと云ふ

其徳丸は河内國山畑村の長者の子たり其村の事

は因國寢屋村の長者の女たり是亦も其河州紀にて

云卷の事あり又あり梅と名を呼ぶ梨園温存あり

半ありたりき

○妙心寺再任開衣の令を以て祝詞事儀をも亦

後餅果をとりて是を徹して濃茶を以て數十貫の

僧より一椀の茶を以て六人にて喫しぬ終て

立く主賓揖し其をとり帰ると濃茶を以て一必一

椀を数人にて喫しぬ其椀一茶或は元禪家

ありてはと茶と云ふは、傍家のものも茶事必
座を設け、縁を掛け花を挿し、元傍家存その傳
茶より起りしと

○下野國足利學校仁明天皇御宇小野篁所建安
異邦傳來先聖及十哲昼像二件有釈菜之禮後
世為浮屠氏之有隸相州鎌倉建中寺其後密宗
僧守之関山派下之僧居之号淨國寺僧快元所
中興也自第五世東井之時以六世之住文伯在座之
関子齋像為子路
時寺院田祿書籍尽成灰也九華時依無乱祭畧
離折八世宗録文時豐臣秀吉沒取學領秀次欲
移學校於京師九世住三要乃聖像并額書卷赴

洛神君有嚴命返于足利云々

寛永十三年四月十日我敬公學校謁聖像掘
正意從名駕拜之仍筆記留家

関子齋之像為子路者北条早雲寄進之裏書河
内公与路云々敬公以延喜式礼正之云々

○拾州免原船魚崎と云々、
横をとりていひ傳へり、
より音形を傳へて帝も奉り、其形を武庫の水川
よりくつとて、
て里と松あり、一所たり、を大水とて松原の松を

淡路とくまを魚崎の里も地一遠くは東の方へ移りし
り大松原とい柳種くくく大松原も延のく移りとい
松ちもくく生きたくく也はとい魚崎も松原とい大松
のくくく人思くく國華万葉拾陽群信も人とい淡路
村の西もありくく半といあやもくく也松原とい大松
里のふといくく巨吉川の西もありくく

○正徳中朝鮮来聘洋もくく柳宗為門下僧の
洋書ありくくこの洋車寄を中門廊と稱し別々中
門を立ちもくくくくく洋車寄をくくく洋車寄
といくくくくく作くくくくく亦韓人とい城の時訪家本
常く石冠物衣の差もくくくくく物衣の時を諸大夫

以とも姿ありくくくく指を冠を命くく

○浮屠の書く海潮を神祕の变化くくくくく山海
經海嶺出入の度もくくくくく海をくくく
さくくくく也海嶺志方人といくく海は月の盈虧と陰
といくくくくの海くくく一元の気外障は氣昂て
地沈むは水溢りて潮もくく地沈む時は水消りて
海もくくくくく一理ありといくく侍り大地震の時
は必沈滞漲りて陸をくくくくく定たりくく氣外
て地沈むくく水動きありくくくの海は亦地震の
後くく海はくくくくく大くく海をくくく事
をくくくくくく侍り大地沈くくくく

